

することが「好ましい」と言うのである。この場合の like は I like quiet boys. の like と同じであつて、後の like が「boys を好む」となるとは思われない。

## 7.

Subordination という現象を英語の表現に認めることから出発して three ranks が設けられ、更に junction と nexus の体系が展開されたが、それらが最初の出発たる subordination から逸脱した事実を明かにして来たのであるが、そう言う根本的な錯誤ということを一応考慮の外に置けば junction 対 nexus には優れた考察の跡を認めることが出来、nexus の内部体系にも非常に鋭敏な洞察力が働いている。しかしあまりに elaborate な機構は却つて cumbersome になることもある。nexus 体系はもう少し単純化する必要があるように思われる。吾々はむしろ Sweet の assumption という用語に Jespersen の junction よりも深い愛著を感じるものであつて、たとえ既述の如く assumption の考えかたに不備なものを認めるにせよ、assumption という用語に含蓄される味は junction や nexus の如き平板な用語よりも訴えるところが直接である。ranks の名称としての primary, secondary, tertiary も単に I, II, III を印象づけるに過ぎず、吾々が実際に英語の文例からこの語は primary であると言う場合は noun 又は noun-equivalent であることを確かめた上で primary と称するので、この間に二重の手間を取ることになる。Accidence における語の品詞とは別箇に Syntax における語の機能の名称を定めたいとは誰しも考える事ではあるが、Jespersen の rank も結局は I = noun, II = adjective, III = adverb と見ても大差ないとすれば noun, adjective, adverb という名称が如何に必要であるか分る。この問題に就いては少し詳しく論述すべきであるが今は省く。要するに primary, secondary, tertiary の如き迂遠な用語の代りに noun use, noun-equivalent の如き品詞名による用語の方がはるかに有効適切だと思ふ。

Noun, adjective, verb に subordination の観点から新しく考察を加えた次第である。

(昭和 28 年 9 月 4 日稿)

の語間の連結が一見滑かに見えるので、「走っている犬」「犬が走る」と、subordination や predication の如く完結しているように取られがちであるが、実は subordination でも predication でもなくて語間には一種の gap が存在しているのである。これは *I want you to come.* のように “to” が入ることによつて gap が明瞭になることもある。Sweet は *A New English Grammar*, § 124 に次のように述べている。

Hence such a sentence as *I like boys when they are quiet* or *I like quiet boys* practically means ‘I like quietness’ as much as ‘I like boys’. Such a sentence, indeed, as *I like boys to be quiet* does not imply even the slightest liking for boys, as the other sentences do. And yet in this last sentence the only word that *I like* governs grammatically is *boys*, *to be quiet* being only a grammatical adjunct to *boys*; while from a logical point of view *I like* is connected directly with *to be quiet*, to which *boys* is a logical adjunct, the sentence being logically equivalent to ‘I like quietness of boys.’ We may call this phenomenon ‘indirect government.’

この Sweet の考えかたを Jespersen は *The Philosophy of Grammar*, p. 117 で次のように批判している。

It would be more correct to say that it is not *boys* that is the object, but the whole nexus consisting of the primary *boys* and the infinitive, exactly as it is the whole clause and not only the subject of it that would be the object, if we were to translate it into “I like that boys are quiet.” (This construction is rare with this verb, though NED has a quotation from Scott; with other verbs which also take the acc. with the inf., such as *see*, *believe*, it is in common use.)

Sweet の言うように (1) *I like boys to be quiet.* は logically に (2) *I like quietness of boys.* に相当すると言うことにも賛成しがたいが、Jespersen の言うように (3) *I like that boys are quiet.* と言えらると思われぬ。(1) と (2) と (3) にはそれぞれの構文と内容とが異なつていて必ずしも同等には取扱えないのである。なるほど “believe” は

*I believe him innocent.*

*I believe him to be innocent.*

*I believe that he is innocent.*

と三通りの言いかたが可能であつて、内容も大体一致する。しかし “see” は既述の如くこのような一致は望めない。動詞によつては infinitive を取るものと “that”-clause を取るものとが固定しているものがあつて自由な選択が利かないものがある。( *I want to go.* とは言えても *I want that I go.* とは言わない。 *I think that*…はあるが *I think to*…はあるにはあつても普通は用いない。 *I told him to go.* は *I told that he went.* とは言えない。) *I like boys to be quiet.* は *boys* と *be quiet* とを *like* が結びつけて *boys be quiet* > *boys are quiet* を実現

と (7) は上述の理由で問題の外に置くとして、(1) から (5) までは皆知覚表現である。(1) と (2) は知覚の対象が dog であるが (3) では **running, barking** という動作が対象である。ところが **I see running. / I hear barking.** とは普通言わないで **dog's** を必要とする。(A) (1) の **I see a dog.** と (B) (1) の **I hear a dog.** とを比べると、前者は犬の姿を見るので、後者は犬の声を聞くのである。前者はこのまゝで意味が十分であるが、後者は不十分である。そこで (2) のように表現して、犬がどうしているかを示して、それを知覚しようとする。「走る犬」は「見る」のであり、「吠える犬」は「聞く」のである。しかし「走る」「吠える」というのは「犬」に就いて言うことであるから、「犬が走る」「犬が吠える」のを知覚する表現が生まれるのは当然であろう。(4) と (5) がそれに当るのである。(2) (3) (4) (5) は同じ場面の描写であつてもその表現と感覚が違つているのである。(2) の **running dog, barking dog** はこれだけで完結する内容の名詞句であつて **subordination** である。(3) の **dog's running, dog's barking** も **subordination** の名詞句である。ところが (4) の **dog run, dog bark** は (2) と (3) のような **subordination** 関係ではない。また **dog runs, dog barks** という **predication** 関係でもない。**subordination** も **predication** も完結した内容であるのに、**dog run, dog bark** はこれだけでは未完結である。これを完結させる機縁を作るものが **see** と **hear** なのである。

- (a) { **see (a dog + run)**  
      **hear (a dog + bark)**
- (b) { **see (a running dog)**  
      **hear (a barking dog)**  
      **see (a dog's running)**  
      **hear (a dog's barking)**

(b) の括弧の中は **see, hear** と関係無しに完結している **subordination** であるが、(a) の括弧の中はそれ自体は **subordination** ではないが、**see, hear** を俟つてはじめて完結する点では **see, hear** の **subordination** 関係と言うことが出来る。(6) (7) の “**that**”-**clause** の完結されたものと (a) の括弧の中の未完結の有様を比較すべきである。(5) の **dog running, dog barking** は (2) の **running dog, barking dog** と同じ **subordination** と見られる場合もあり得る。**I see a dog running after a cat. / I hear a dog barking by the gate.** は「走っている犬」「吠えている犬」とも「犬が走っている」「犬が吠えている」とも取れる。後者の意味に取るならば (5) は (4) と同列に置かれて

- see (a dog + running)**  
**hear (a dog + barking)**

と考えると、括弧の中は未完結な内容となるのである。**dog running** も **dog run** もそ

red とを結合して文を作ると同じように (2) では paint が door と red とを結びつけてはいるものの、文を作るのにはこれだけでは不十分で別に主語を必要とするのである。

The dog barks. は動詞が名詞と結合して文を作ったものであるが、The door is red. から red door が推定されるのとは異なつて、The dog barks. から barking dog を考える手続は普通行われぬ。もしも barking dog と考えるとすればそれはもはや現実には吠えている犬というよりも「吠える犬」のような generic なものになる事が多い。これは動詞の分詞が名詞に結合して subordination 関係によつて形容詞の機能を帯びるからである。I hear the dog bark. は Jespersen の言うように I hear that the dog barks. と比較することは出来ない。I saw the King's arrival. も I saw that the King arrived. と全く同じ表現ではない。hear, see が verbs of perception であるということが特に I hear the dog bark. / I see the dog run. 等の構文に強調されることは注目すべきことであつて、犬が吠えるのが「聞える」、犬が走るのが「見える」等と聴覚や視覚に訴える事柄の描写に用いられているのであつて、I hear that the dog barks. / I see that the dog runs. となれば犬が吠える（という）「こと」が聞えたり、犬が走る（という）「こと」が見えたりする筈がないから、この hear や see は聴覚や視覚に訴えるものとは違つて、「犬が吠えると聞く」「犬が走ると見る」のように「聞いて知る」「見て知る」の意味になるのである。I saw the King's arrival. は I saw the King arrive. と比較すべきものであつて何れも視覚による「見た」の意味の動詞 saw を用いているのである。

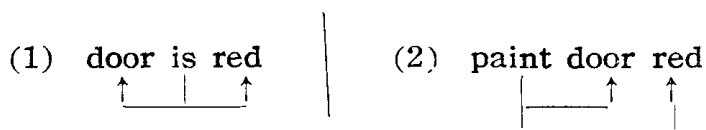
- (A) (1) I see a dog.  
(2) I see a running dog.  
(3) I see a dog's running.  
(4) I see a dog run.  
(5) I see a dog running.  
(6) I see that a dog runs.  
(7) I see that a dog is running.

- 
- (B) (1) I hear a dog.  
(2) I hear a barking dog.  
(3) I hear a dog's barking.  
(4) I hear a dog bark.  
(5) I hear a dog barking.  
(6) I hear that a dog barks.  
(7) I hear that a dog is barking.

(A) と (B) の二つの group にそれぞれ七つの文を並行させたものであるが、(6)

の nexus と言うものの中には sentence と clause のような S+V の形態を具備しているもののほかに S+V となるべき要素を具備しているものも含めていることが分る。言わば「意味上の文」を「文法上の文」に併せて nexus と名づけたのである。だが意味上の文ということになれば Jespersen の挙げたような dependent nexus に止まらないでもつと広い範囲にわたつて nexus と称すべきものが認められることにはならないであろうか。my book にさえ文の要素が具備されていると言えないことはないのである。I see a dog barking at a cat. の a dog barking at a cat は nexus とも junction とも取れる。a barking dog も a dog barking も結局は「意味上の文」になると言えないことはない。Sweet が the round earth を assumption と名づけてその中に (the earth is round) を承認しているものと見做したことがこゝに考え合わされるのである。junction と nexus との区別がつかない事になってしまうのである。

形容詞は名詞に従属するのが普通であるが名詞よりも形容詞の方が主となる場合がある。「きれいな花だ」は That is a beautiful flower. であろうが、「きれいなあ」は It is beautiful. とか How beautiful it is! とか言うであろう。代名詞に対しては形容詞は従属関係には置かれないのである。「好い天気だ」は fine weather を用いるよりも It is fine. と言う。The weather is fine. とも The day is fine. とあまり言わない。しかしとにかく形容詞は名詞に従属するのが常態である。red を door に従属させて red door とすれば a red door, the red door の何れも用いられる。ところが red を door から離して predicate に移すと A door is red. とは普通は言わないで、The door is red. と言う。The door is red. と言う代りに It is a red door. と言うことが出来るが、It is the red door. とは言えない。だが a と the を抜きにして考えると、red door は generic な door を表現するものであるが、door is red は door と red とを結びつけて red door であることを現実肯定するものである。Sweet が assumption に predication を推定したのは反対にこの場合は predication の中に assumption が推定されるのである。これは形容詞が結局名詞への subordination 関係にあるという事を示すものである。I paint the door red. から paint door red を抜いて来ると、door is red と比較することが出来る。is が door と red とを結びつけるように paint も door と red とを結びつけている。



(1) も (2) も door と red とが結びつけられて red door が推定される事は同じである。しかし (2) から door is red という「意味上の文」を考える必要はないのであつて、その is には paint が当つているのであり、(1) の is が door と

は動詞を中心とした **subordination** であるとは言い切れないけれども、とにかく動詞を中心としているとは言える。しかし主語と述語の構造は断じて **subordination** ではない。従つて Jespersen の言うが如き **subordination** による **nexus** 関係は存在しないと言わなければならない。

## 6.

The red door, the barking dog の **junction** に対して The door is red. / The dog barks. を **nexus** と称するのは **independent nexus** であつて、**nexus** にはこの他に **dependent nexus** と称するものがあると Jespersen は説く。その中に先ず **clause** が挙げられるが、これは **sentence** と同じ構造だから理解は容易である。次に **nexus-substantive** というのがある。his kindness の kindness は being kind という事と同じで、his kindness は he is kind に相当する **nexus** であると言い、his arrival は he arrived に相当する **nexus** であると言う。kindness, arrival を単なる名詞の **primary** とするならば his は **secondary** であつて、his kindness, his arrival は **junction** と考へべきものであるのに、kindness や arrival のような抽象名詞は形容詞や動詞に縁のあるものだからその形容詞や動詞が **nexus** を構成する力を与えるのだと言うのである。これは甚だ面白い着眼ではあるけれども、例えば his height に he is high が含まれることになつて具合の悪い点がある。**dependent nexus** には又 **nexus-object** というのがある。I paint the door red. / I hear the dog bark. の如きものである。そこで次のような比較対照表を作つて見よう。

junction	nexus
the red door	The door is red. (independent) I paint the door red. (dependent)
the barking dog	The dog barks. (independent) I hear the dog bark. (dependent)
(the King's arrival)	I saw the King's arrival. (dependent)

Jespersen は I paint the door red (paint it so that afterwards it is red). / I hear the dog bark (cp. hear that he barks). / I saw the King's arrival (cp. I saw that the King arrived). と *Essentials of English Grammar*, Chap. IX で説明している。(I hear that he barks. は「犬が吠えるのが聞える」意味にはならないから、これと I hear the dog bark. とを比較せよと言うのは Jespersen にも似合わない認識不足な説明ぶりだと言わなければならない)。これで見ると **dependent nexus** の中には **independent nexus** となるべきものを含んでいるから **nexus** と称したもののである。即ち Jespersen

である。**play** に主体があることは **to play baseball** として見ても分る。即ちこれが名詞（句）であると言うのは **baseball** が名詞で、それに **play** が従っているからではなくて、**baseball** が **play** に従つて **play** が名詞用法となつたからである。**S+V** は **sentence** を作る **predication** であるが、**V+O** は動詞が目的語を **govern** するという見かたから “**government**” 関係と称することが出来るであろう。**government** は前置詞+目的語の場合にも用いられるが、**V+O** はやはり動詞であるのに **prep.+O** は前置詞でもなく名詞でもない別のものになることは注意すべきである。これは **S+V** が **S←V** と名詞にもならず **S→V** と動詞にもならないのと比較することが出来る。しかし **S+V** には **government** 関係はないが、**prep.+O** は **government** 関係である。前置詞はもともと副詞から来たものであるという見かたからすれば **prep.←O=** 副詞として、同じ **government** 関係の **V+O** を **V←O=** 動詞としたものと一致させる事が出来るのであるが、あまり規格にはめ過ぎて文法現象を窮屈にするのは賛成しがたいので、そうまでして無理をする必要はあるまい。**V+O** にしても **prep.+O** にしても **government** 関係であるという事は **O** の方向が **governing word** に向けられることを意味するもので **←O** であつて、主語の方向が **S→** であるのと対蹠的又は対称的であることに注目されるのであるが、**S→←V** 又は **S↔V** で **sentence** を作るのに対して、**V←O** 又は **prep.←O** は一方的である点では **subordination** に近いとも、類するとも言えるであろう。しかし **V←adv.** の本当の **subordination** とは区別しなければならない。それは **V←adv.** には **modification** はあるが **government** は無く、**V←O**、**prep.←O** には **government** はあるが **modification** は無いからである。

**V+C** には **modification** も **government** も存在しないのであるが、**V+C** がやはり動詞であることは承認される。例えば **Dogs are faithful.** の **predicate** を主語から切り離して独立させると、**to be faithful, being faithful** となつて、これは明かに **faithful** が中心ではなくて **be** が **faithful** を率いているのである。（たゞし意味的には勿論 **faithful** が重要であつて **be** は **copula** であるのは事実である。）即ちこゝにも **V←C** の方向が認められるのであつて、それは **subordination** ではないけれども **subordination** の近くにあるものとは言えるであろう。

以上のように見て来ると形容詞は名詞に対しては常に **subordinate** であるが、動詞は名詞に対しては主語、述語の関係においては常に **co-ordinate** であり、述語の中では動詞は名詞をはじめ他の品詞を（広い意味で）**subordinate** している。もしも動詞が名詞に **subordinate** しているとすれば、それは **verbal** としてゝあつて **predicate verb** としてゝはない。名詞、形容詞に比べて、動詞はその **inflection** が多様であるためにその語法現象も複雑であつて単一の視野で観察するだけでは不十分なのである。

主語の内部構造は名詞を中心とした **subordination** であるが、述語の内部構造

無理だし、a barking at a cat dog, an at a cat barking dog などは不可能である。とすると a dog barking at a cat と言うほかはない。A cat catches mice. の junction は同じように a cat catching mice であろうが、この catching は descriptive な力が強くて nexus の方の generic な意味を示すのには不適當である。そこでやむを得ず a mice-catching cat のような無理な表現によるほかはなくなる。A rose is a flower. の如きはその junction は考えられない。強いて言えば a flower of rose とでもするほかはないが、これは A rose is a flower. の junction と言うには不適當である。又代名詞を用いた nexus の I am happy. / He is running. 等も junction にはならない。happy I とか running he は nonsense である。

## 5.

主語に対する述語が主語に subordinate されるものでないことは既に説いたが、主語の内部構造は subordination 関係によつて成立するが、述語の内部構造はどうであろうか。動詞+副詞は副詞+形容詞と同じように subordination である。しかし Jespersen の言うように secondary と tertiary の関係ではなく primary と secondary の関係であることも前述の通りである。述語の構造には副詞のほかに目的語となる名詞や補語になる名詞、形容詞も参加するのであるが、これらは subordination からはどう考えられるであろうか。Jespersen は object も動詞 (secondary) に対して primary であると言い、

An object is a primary word (or word-group) which is intimately connected with the verb of a sentence, though less intimately so than the subject. (*A Modern English Grammar*, Part III, 12. 11.)

と説明している。そうすると次のような図式が出来上る。

$$\begin{array}{c} S + V + O \\ \underline{I + II + I} \\ \text{nexus} \quad ? \end{array}$$

S+V は nexus だが V+O は何であろうか。S+V+O 全体が nexus だから V+O は問題にする必要はないと言うならば O を primary とする理由を説明することが出来なくなるのである。V+O が II+I ならば V→O=名詞(句)になつてしまう。これは無理である。Boys play baseball. を I+II+I の nexus とするならば

play baseball = 「する野球」

II → I

となるが、実は「野球をする」とならなければならないから play←baseball となる筈である。こうなればもはや Jespersen の rank では説明が出来ないことになる。主体は play にあるのであつて play baseball は名詞(句)ではなく動詞(句)

a high mountain	A mountain is high. (1)
the high mountain	The mountain is high. (2)
high mountains	Mountains are high. (3)

(1) と (3) は generic な言いかたになり、(2) は特定の山を指して言うのが普通であろう。しかし (1) (3) の generic な言いかたは真実を述べてはいないから実際はこんな言いかたは無いわけである。従つて a high mountain と high mountains に対する nexus は有り得ない事になる。こゝで又問題になるのは is, are の存在である。これらの動詞を secondary とすると high も secondary で二つの secondary が同等に mountain(s) に subordinate することになる。secondary が並ぶことは junction では珍しい事ではない (high, woody mountain) が、nexus においては如何なものであろうか。Jespersen はこの場合 is, are を copula として意味上重要でないので無視して high だけを secondary として主語に従属させようとする考えのようである。それならば同じ copula 構文で名詞を補語に取るもの、例えば A rose is a flower. の flower は primary であつて secondary になる筈はないから、この文は I + I の構文と言うことになる。junction と nexus とを primary, secondary の subordination から出発したものとする限においてこれでは不合理な結果になつたと言わざるを得ないであろう。

junction と nexus との対比において更に考うべき事がある。それは a flying bird, a high mountain の junction は tense が無いが、A bird is flying. / A mountain is high. には tense がある事である。flying には aspect の存在は考えられても現在、過去、未来の tense は考えられないし、high に至つては aspect さえ欠いている。ところがこれらの junction に対比させるために nexus を持つて来ようとするれば当然そこに tense の決定が必然的に生じて来る。A bird flies. なのか、A bird flew. なのか、A bird will fly. なのか、A bird is flying. なのか、A bird was flying. なのか、A bird will be flying. なのか分らない。従つて a flying bird の junction に対比すべき nexus は以上の種々の表現を羅列したものということになる。A high mountain の nexus も同様に、A mountain is high./A mountain was high./A mountain will be high. などとなるであろう。

逆に nexus を junction に対照せしめようとする種々の困難にぶつつかる。A dog runs. の junction は a running dog で run をそのまま用いることが出来ないのは前述の通りであるが、A dog ran. もやはり a running dog と言うよりほかはない。A dog has run. の如き perfect も junction では表現するすべが無くてやはり a running dog とするより方法がない。しかし a running dog から perfect を想像することは不可能と言つてよからう。A dog is barking by the gate. の junction は a barking dog by the gate で表現し得られるであろうが、A dog is barking at a cat. の junction は a barking dog at a cat は

#### 4.

junction と nexus の対称の魅力は Jespersen ならずとも相当強力なものであるが、今こゝでやゝ細密に検討を加えて見たい。

「飛ぶ鳥」と「鳥が飛ぶ」を

a flying bird | A bird flies.

と対照させると、adjunct は flying と現在分詞であるのに adnex は finite form の flies である。即ち日本語の「飛ぶ鳥」と「鳥（が）飛ぶ」ほどに対称がうまく行っていない事が分る。flying と flies の共通部分たる “fly” だけに目をつけて -ing や -s を無視するのは単なる word-order の比較と言うに止まるもので rank の問題や意味の問題は考慮の外に置かれることになりはしないであろうか。a flying bird と A bird flies. とを比較するためにはこれらの語群に参加するすべての単語の機能を考え、語群の意味も調べなければならない。a flying bird は「(一羽の) 飛ぶ鳥」で A bird flies. は「(一羽の) 鳥が飛ぶ」で大体良さそうである。しかし実は flying と flies との差は「飛ぶ」という訳語では表わせないほど大きなものである。a flying bird は「飛ぶ鳥」のほかに「飛んでいる鳥」と訳すことも出来る。言いかえれば flying という現在分詞は Aspect の点で terminate と progressive の両面を有するのである。A bird flies. と A bird is flying. とで区別出来る二つの aspect を a flying bird は兼ねているために便利な点もあるが他面不自由でもある。a fly bird で「飛ぶ鳥」が表現出来ればいいがこれは不可能である。特に区別するためには a bird that flies ; a bird that is flying とすればいいわけであるがこれは clause を含むことになつて問題は別になる。そこで意味も考慮すれば

a flying bird | { A bird flies.  
A bird is flying.

と対照することになる。次に a の代りに the を用いると

the flying bird | { The bird flies.  
The bird is flying.

となる。不定の鳥が特定の鳥になるだけで別段変りはない。今度は複数の鳥にすると

flying birds | { Birds fly.  
Birds are flying.

となる。以上全部に通じて言えることは is flying, are flying は descriptive な表現であるが、flies, fly は generic な表現であり、flying bird(s) の flying はその何れにも取れるという事である。

次に形容詞の場合を調べよう。

junction も nexus も共に subordination 関係であるとする **a flying→bird** が名詞(句)であると同様に **A bird←flies.** も名詞(句)ということになる。これは許されないことである。**a flying bird** と **A bird flies.** とをその symmetry に着眼するのはいいとしても、この二つを同じ構造のものとして説明することには非常な無理があるのである。Jespersen もそれを認めて、一方を junction と呼び他方を nexus と呼び、又 junction の secondary を adjunct と呼び nexus の secondary を adnex と呼んで、adjunct と adnex の間には差のあることを示してはいるけれども、同じく secondary であるとするれば結局両者の区別は無きに等しいものであると言わなければならない。

Jespersen の言う nexus は sentence と clause のほかに意味上の主語と動詞とを具えた「文になるべきもの」の一切を包含する極めて広汎なものであるが、結局これは predication 関係を示すものである。predication は subject + predicate で sentence を構成するものであるが、sentence はどこまでも sentence であつて名詞(句)にも形容詞(句)にもなる筈がないのである。即ち predication 関係には subordination 関係は認められないわけであつて、従つて nexus ということも考えられないのである。**a flying bird** は

**flying → bird** = 名詞

であるが、**A bird flies.** は

**bird ← flies** = 名詞

とはならないのであつて、

(1)                      (2)

**bird** + **flies**

となつて、**bird** と **flies** とはそれぞれ別の枠に属して、その枠の中で primary の位置を保つものである。従つて (1) も (2) も別々の subordination 関係を構成し得るのである。(1) では **A white→bird** ; **A black→bird** 等となり、(2) では **flies←swiftly** ; **flies← high up in the sky** 等となつて、皆 subordination を構成している。(1) は名詞(句)であり、(2) は動詞(句)である。だが **flies** という finite verb はそれが finite であるという所以を主語の人称と数とに一致するという事に求められるとすれば結局主語の **A bird** に従属することになるのではないかと考えられるかも知れないが、これは concord 又は agreement の関係であつて主語と動詞とが同一資格の下に「お互いに」一致することを意味するもので主語が動詞に又は動詞が主語に一方的に従うものではない。**A bird flies.** の如きは subordination ではなくて predication と称すべきであつて、Jespersen の言うが如き rank の差は存在しないと言わなければならない。

動詞が名詞と共に用いられるというのはどんな形式によるのかを調べて見よう。「飛ぶ鳥」と「鳥が飛ぶ」とを並べると前述の「高い山」と「山が高い」とよく似ていることが分る。ところがこれを英語にあてはめて見ると

- (a) a high mountain
- (b) A mountain is high.
- (c) a flying bird
- (d) A bird flies.

形容詞の **high** の用いかたと動詞の **fly** の用いかたとの間に差のあることを見いだすのである。即ち **high** は (a) でも (b) でも形は同じなのに **fly** は (c) では **flying** となり (d) では **flies** となつて形態が違つていのである。しかし (a) と (c) とは **subordination** から見れば全く同じものであつて **high** と **flying** とは形容詞 (用法) の **adjunct-word** なのである。それでは (b) と (d) の **high** と **flies** は **subordination** から見ればどうであろうか。**Sweet** によれば **A bird flies.** の動詞 **flies** は主語の **bird** の **modifier** であると言う。**Jespersen** によれば **a flying bird** は **junction** で、**A bird flies.** は **nexus** であつて、両方ともに **rank** から見れば同じ構造であると言う。即ち

(junction)	(nexus)
a flying bird	A bird flies.
II + I	I + II

この図式のような **symmetry** (対称) はおそらく **Jespersen** をして吾が意を得たりと驚喜させたのかも知れない。しかし言語の現象にあまり鮮かな図式を求めることは大きな危険を伴うおそれがあることを覚悟しなくてはならない。彼は上のような **symmetry** を提示することによつて少くとも二つの錯誤を犯していると思われる。

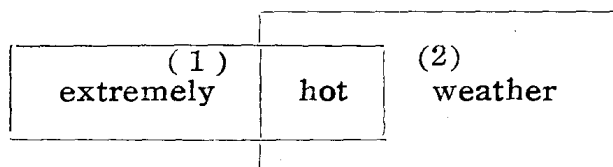
**flying** を **secondary** とするのは現在分詞の形容詞的用法から考えれば首肯出来ることである。しかし **A bird flies.** の **flies** が **secondary** であるとするれば **finite form** の動詞が形容詞用法であると言うことになつて **secondary** の中に形容詞のほかに動詞も加わることを容認するわけである。品詞と **rank** とは別の **sphere** のものであると彼も言つていのであるから **secondary** の中に形容詞のほかに動詞を入れても構わないようなものの、**three ranks** に関して **Jespersen** の示したあらゆる用例を見てみると、**primary** と称するものは結局 **noun** 又は **noun-equivalent** であり、**tertiary** も結局は **adverb** 又は **adverb-equivalent** にほかならないのである。又 **secondary** と称するものも **adjective** 又は **adjective-equivalent** に当るものの用例のみであつて、**nexus** の **verb** に限つてこれを **secondary** に加えているのであつて、恰かも一つの例外のように取扱われているとしか思えない。

う考えかたから脱し切れないでいるらしいことがこの **shifting** の説明から窺われる。**absolute novelty** が **absolutely novel** になるのは名詞の **novelty** と形容詞の **novel** の差に基づく当然の変化であつて問題はないのであるが、形容詞＋名詞＞副詞＋形容詞を **Ⅱ＋Ⅰ＞Ⅲ＋Ⅱ** とするのは単に名、形、副という品詞名の代りに **Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ** という **rank** の名を置き換えたに過ぎないものだと言われても仕方がないであろう。**absolute → novelty** と **absolutely → novel** とは品詞の **shifting** は別として **subordination** の現象は同じものである。**absolute** と **absolutely** はそれぞれ **novelty** と **novel** に対して **adjunct-word** と **head-word** の関係にあり、従つて何れも **secondary** と **primary** との関係であつて **Ⅱ＋Ⅰ** と見るべきであつて、一方を **Ⅱ＋Ⅰ**、他方を **Ⅲ＋Ⅱ** と区別するいわれは理解しがたい。そもそも **primary, secondary, tertiary** の **ranks** は **primary** が先ず存在してそれに **secondary, tertiary** が従うものであるから、**primary** の無い **secondary, tertiary** は考えられない筈である。この点で品詞の名詞、形容詞、副詞は名詞なくしても形容詞の判定は可能であり、副詞の判定も可能であるのとは事情を異にするものである。**absolute novelty** は形容詞＋名詞で **Ⅱ＋Ⅰ** でいいが、**absolutely novel** は副詞＋形容詞ではあつても、**rank** は **Ⅲ＋Ⅱ** に **shift** したのではなくてやはり **Ⅱ＋Ⅰ** でなくてはならない。もし **Ⅲ＋Ⅱ** だとすればその **Ⅱ** の **rank** を決めるべき **Ⅰ** はどこにあるのかと反問されるからである。**rank** を **subordination** 現象と見るならば既述の如く二語の間にしか **subordination** 関係は存在しないのであつて、例えば **utterly dark night** は **Ⅲ＋Ⅱ＋Ⅰ** ではなく **utterly → dark, dark → night** と別々に **subordination** を認めてそれぞれ **secondary** と **primary** の関係にあると言うべきである。即ち **tertiary** は認められないことになるのである。

### 3.

**Borrow sorrow.** という調子の好い諺がある。「借金悲劇のもと」という主旨であろうが、もとより **sentence** を構成してはいない。けれどもこの諺の意図する内容が読者にじかに通じるのは妙である。**borrow** は動詞しかないが、**sorrow** は動詞も名詞もあるが、こゝではどつちだろう。ある小説の中でこの諺と同じ内容を **Borrowing is sorrowing.** と書いてあつたのを見ると、これは **Borrow sorrow.** の **paraphrase** として **sentence** 化したものと見る事が出来て、**borrow, sorrow** 共に動詞であると決める一つの手がかりを与えてくれる。動詞はそれだけ独立して用いることは日常の **speech** ではあまりなくて、上の諺も **If you borrow, you will sorrow.** とか **Borrow, and you will sorrow.** 等と文の形式を用いるのである。たゞし **Borrowing is sorrowing./ To borrow is to sorrow.** とすれば動詞の単独使用となるけれども、これは動詞の名詞用法であるから、形容詞と同じように動詞もそれ自体では独立し得ず、名詞の形に変えるか、他の名詞と共に用いるかしなければならないのである。

の subordination を含むものであるが、extremely (副詞) と weather (名詞) との間には subordination 関係は認められないのである。しかし hot (形容詞) の介在によつて extremely も hot も weather に吸収されてしまうことになるのである。これを次のように図示することが出来る。



(1) と (2) とはそれぞれ subordination 関係であるが、(1) と (2) との間に subordination があると言うことも出来るのは hot があるためであつて、extremely と weather との間には実際には subordination 関係は無いのである。ところが a long, straight street では long → street と straight → street であるから二つの形容詞 long と straight とは別々に street との間に subordination 関係を結んでいるが long と straight の間には subordination は無いのである。

Jespersen は以上のような subordination 現象を three ranks によつて説明している。

extremely hot weather

III + II + I

weather は primary (I), hot は secondary (II), extremely は tertiary (III) の rank であると言う。そして次のような ranks 間の shifting を観察している。

absolute novelty

utter darkness

awful fun

perfect stranger

形容詞 + 名詞

II + I

absolutely novel

utterly dark

awfully funny

perfectly strange

副詞 + 形容詞

III + II

accurate description

frequent visits

severe judge

careful reader

形容詞 + 名詞

II + I

describes accurately

visits frequently

judges severely

reads carefully

動詞 + 副詞

II + III

Jespersen は three ranks は品詞とは別の sphere に属するものだと言いながらやはり primary = noun, secondary = adjective, tertiary = adverb とい

たのであるが、就中 Jespersen の junction 対 nexus の理論は巧緻にして雄大なものとして特記すべきものであらう。彼によれば the round earth は junction の構造であり、The earth is round. は nexus の構造であると言う。junction, nexus の理論の根底には例の three ranks の原理が横たわっているのは言うまでもない。

## 2.

Poor and liberal, rich and covetous. 「貧乏の気前よし、金持のしみつたれ」という諺がある。これは形容詞の羅列であるがそれで意味が通じる。しかし sentence ではない。これは Poor people are liberal; rich people are covetous. というような文となるべき内容を形容詞だけを抜き出して諺の簡約体にしたものであるが、諺のような型のものとは異なつた日常の speech において吾々の使用する形容詞は Poor people are liberal. のように名詞の存在を必要とするものである。尤も poor people の代りに the poor とも言えるが、the の存在は poor の名詞性（又は名詞的用法）を暗示するものであつて、やはり形容詞の独立性を示すものではない。poor という形容詞が他の名詞の助けを藉りないで独立しようとするれば poverty, poorness のようにそれ自体が名詞とならなければならない。poor people, rich people のように形容詞は名詞に附随するものであるが、これに種々の見かたから種々の名称を与えることが出来る。

形 容 詞 → 名 詞

- (a) modifier            modified
- (b) adjunct-word      head-word
- (c) secondary          primary

(a) は形容詞が名詞を modify（修飾）するという見かたから modifier（修飾語）と modified（被修飾語）とに分けたもので“modification” 関係による名称である。(b) は Sweet の用語で名詞が head-word（主要語）で形容詞はそれに従属する adjunct-word（附加語）であるとするもので、“subordination” 関係による名称である。(c) は Jespersen の rank による名称であつて、やはり subordination から出発しているものである。この subordination 現象に就いて仔細に観察すれば次のような事が結論として見出される。形容詞が名詞に subordinate であると思えば形容詞+名詞はその主体は名詞であるから全体としてはやはり名詞（句）であつて、一種の compound noun とも見られる。この場合形容詞は名詞に absorb（吸収）されてしまつて、大きな名詞が出来上つたと考えられる。これを“absorption” 現象と言つてもいいであらう。この現象は形容詞→名詞=名詞ばかりでなく、副詞→形容詞=形容詞にも、副詞→動詞=動詞にも見られるものである。(awfully→wicked=形容詞/work←hard=動詞)。そうすると extremely→hot→weather=名詞は extremely→hot=形容詞と hot→weather=名詞の二つ

# Subordination 現象

—— “Rank, Junction, Nexus” 体系の批判 ——

空 西 哲 郎

## 1.

「高い山」と「山が高い」とでは「高い」という形容詞の用法が異なると言い、前者は連体形の名詞修飾用法であり、後者は終止形の述語用法である。勿論「高い山」という表現と「山が高い」という表現から吾々の受ける印象はかなり違う。文法的に言えば句と文の相違である。しかし両方ともその要素としての二つの語「高い」と「山」とは共通であつて、たゞその語順が逆である。英語でもこれと同じ現象がある。a high mountain と A mountain is high. の対照に見られる。前者の high は mountain を「直接」に修飾する形容詞で **attributive use** であると言い、後者の high は動詞の is を通して「間接」に mountain を修飾する形容詞で **predicative use** であると言う。以上の日英両表現を比較すると日本語では「高い山」と「山が高い」の共通部分を除けば助詞の「が」が残り、英語の a high mountain と A mountain is high. からは動詞の is が残る。これは日本語の形容詞は用言に属してそれ自体だけで文の述語を構成することが出来るのに、英語の adjective は sentence の predicate を構成するためには verb に依存しなければならないものでそれ自体だけでは predicate を構成する力が無い事を示すものである。Henry Sweet は *A New English Grammar*, §44 でこの現象を次のように説明している。

If instead of stating some attribute or qualification about the subject, we take it for granted, as in —

*For so the whole round earth is every way*

*bound by gold chains about the feet of God, (Tennyson)*

the predicate becomes an **assumptive** (commonly called ‘**attributive**’), and the word *round* — as also *whole* — is said to be used **assumptively** (**attributively**). From such a collocation as *the round earth* we can infer the statement *the earth is round.* Thus assumption may be regarded as implied or latent predication, and predication itself may be regarded as strengthened or developed assumption.

Sweet は the round earth という表現には the earth is round という陳述が内在していることが推断されると見てこれを **assumption** と称したのである。

「円い地球」と言えば当然「地球は円い」ことを承認していると言うのである。これは大変面白い意見であつて示唆に富んでいると思われる。彼をはじめ多くの文法学者がこのような **assumption** と **predication** の対立を取り上げて問題として来